

トイレマークの色分け — ジェンダーと色彩

「日本の色彩」第 4 回は、ジェンダー、つまり男女の性と、色彩との関係についてです。男性が好む色・女性が好む色というのはどこにでもあると思いますが、日本では、それが「規範」である傾向が強いといわれています。規範とは、「この色は男性／女性を意味する」「男性／女性はこの色を使うべきだ／使うべきでない」という暗黙の了解のことです。日本では、「男性は青などの寒色や黒」「女性は赤やピンクなどの暖色」というのが、なかば常識になっていわれます。今日の講義では、さまざまな例をあげて、日本文化における「ジェンダーと色彩」について考えます。なお、今日の講義の内容は、浅野ゼミで 2019 年度に卒業研究を行った南朋花さんの卒業論文 [1] と、2020 年度に卒業研究を行った松下莉奈さんの卒業論文 [2] の成果を参照しています。おふたりには深く感謝します。

男性／女性を指す色

日本では、トイレのマークは、図 1 のように、たいてい男性は黒か青・女性は赤で描かれています。かつて、性別中立の観点から色分けをしないマークを掲げた施設がありましたが、利用者から「間違える」という苦情が殺到し、あらためて色分けをした、という事例がありました。現在でも、図 2 のように色分けをしないトイレマークはありますが、主流ではありません。

トイレのマークのように、言葉が通じなくても意味を伝えるために用いられる図案化された絵を、ピクトグラムといいます。ピクトグラムが広範に使用されるようになったのは、1964 年の東京オリンピックの会場で使われたのがきっかけといわれています。現在用いられている、男女をかたどったトイレのマークも、このときに作られました。文献 [3] は、1964 年東京オリンピックでピクトグラムをデザインした道吉剛氏の講演録です（講義ウェブサイトにはリンクがありますので、ダウンロードして読んでください）。

トイレのマークでの男女の色分けも、このときに作られたという説があります。この説は、NHK テ



図 1: 一般的なトイレのマーク（京都市営地下鉄京都市役所前駅にて）。



図 2: 色分けをしないマーク（ドーンセンター（大阪府立男女共同参画・青少年センター）にて）。

レビの人気番組「チコちゃんに叱られる！」でとりあげられたために、広く知られるようになりました。しかし、道吉氏の講演録 [3] によると、1964 年東京オリンピックで、同氏はトイレのピクトグラムをデザインしたが、色は会場の区域ごとに分けられていて、男女では分けていないそうです。同氏は、当時の米国の子ども服が、男の子は青、女の子はピンクが多く、それがもとではないか、という見解をあげています。

男性／女性が使う色の規範

日本では、小学校に入ると、たいていの子どもが「ランドセル」というカバンを背負って学校に通います。私が子どものころ、ランドセルの色は、男の子は黒、女の子は赤に決まっていた、それ以外の色はあり得ませんでした。また、男の子が赤を持ったり女の子が黒を持つことは絶対になく、それぞれか「赤い持ち物は女の子のもの」という意識がありました。当時の子供用のメガネは、メタルフレームのものはなくプラスチックのフレームでしたが、それですら、男の子用は黒、女の子用は赤に決まっていたのを覚えています。

現在では、さまざまな色のランドセルが売られるようになりましたが、黒と赤以外のランドセルがふつうに売られるようになったのは 2000 年以降のことで、それも当初は「お子さんは、好奇の目で見られても平気な方ですか？」と店が親に確認していた、という話もありました。いま、イラスト提供サイト「イラストボックス」[4] を探してみると、図 3 のようなさまざまな色のランドセルのイラストが見つかりますが、一方で図 4 のように男の子・女の子を描いたイラストでは、やはり黒と赤のランドセルを背負っています。

このような、「男性／女性はこの色を使うべきだ・使うべきでない」という規範は、日本では男性のほうに強いと言われています。つまり、女性はピンクのワンピースでも黒のジャケットでも着ているのはふつうだが、男性がピンクのジャケットを着るのは勇気がいる、というわけです。卒業研究 [1] でも、携帯電話のカバー・Tシャツ・靴下を男女の学生に身につけてもらい、その際自由に色を選んでもらう、という実験をしました。女性はさまざまな色を自由に選んでいるのに比べて、男性は、「女性らしい」と自分が思う色を避ける傾向がありました。

もっとも、男性でピンクのジャケットを着る人は少ないと思いますが、男性向けのピンクのシャツやネクタイは普通で、私も好きでよく着ています。なぜこのような違いがあるのかは、まだ研究の余地があると思います。

ところで、このような、男性にとくに強い色彩の規範は、日本に洋服が入ってきた時期と関係があるといわれています。ヨーロッパでは、19 世紀のはじめに、イギリスを中心に「ダンディズム」という価値観があらわれました [5]。ダンディズムは男性の精神についての価値観で、前世紀の「華美」や「虚飾」



図 3: さまざまな色のランドセル。



図 4: ランドセルを背負った男の子・女の子。

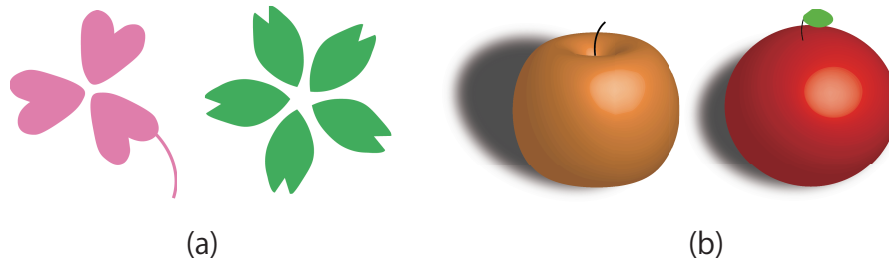


図 5: 色と形のどちらを優先して認識するか? (a) 緑の桜の花とピンクのクローバーの葉. (b) オレンジ色のリンゴと赤いミカン.

をやめ、抑制された中での「こだわり」に美意識を見いだすようになりました。また、19 世紀の資本主義や工業化社会の発展にともない、代々の領主などではなく、「ビジネス」を行う人々が世の中で力を持つようになりました。このこととダンディズムの精神が重なって、華やかな装飾のない、地味で実用的な服装が主流になっていき、抑制された中でネクタイなどで「おしゃれ」をするのが「粋」とされるようになりました。

日本に洋服が入ってきたのは、19 世紀の終わり、明治時代になってからでした。当時の日本は、近代化を急ぎ、ヨーロッパやアメリカの習慣を取り入れていました。そのころの欧米ではダンディズムが主流になっていたため、日本での男性の洋服は、最初からダンディズムにもとづいた地味なものだった、というわけです。日本では、洋服の普及は男性のほうが早かったようです。現在でも、「着物」を着る機会は、女性にくらべて男性は少ないです。

なお、よく「男性は形に注目し、女性は色に注目する傾向がある」といわれます。たしかに、女性のほうが色に関心のある人は多いように感じます。一方、卒業研究 [2] では、「緑の桜の花とピンクのクローバーの葉、桜に見えるのはどちら?」「オレンジ色のリンゴと赤いミカン、リンゴに見えるのはどちら?」という調査を、イラストを呈示して行いました (図 5)。これは、ふたつのものの色を互いに入れ替えて尋ねることで、物を認識するのに色と形のどちらを優先するかを調べたものです。この調査では、色と形のどちらを優先するかについて、回答者の性別による大きな差は見られませんでした。

演習問題

受講生のみなさんの育った国や地域では、「男性／女性を意味する色」というのはあるでしょうか? また、「男性／女性はこの色を使うべきだ・使うべきでない」という規範はあるでしょうか? それらについて、私に教えてください。

*

参考文献

- [1] 南朋花, 性別への社会的な色の割りあてが個人の色の選好に及ぼす影響, 関西大学総合情報学部 2019 年度卒業研究報告 (2020).

- [2] 松下莉奈, 色彩による認知と図形による認知との関係, 関西大学総合情報学部 2020 年度卒業研究報告 (2021).
- [3] 道吉剛, トイレのピクトグラム (シンボル) 誕生とデザインから語る東京オリンピック 1964 年 (講演レポート), 日本トイレ協会ニュース, 14-3 (2014).
<https://j-toilet.sakura.ne.jp/hp/wp-content/uploads/2018/09/201410日本トイレ協会ニュース.pdf>
- [4] イラストボックス <https://www.illustr-box.jp>.
- [5] 深井晃子 (監修), 世界服飾史 (増補新装版), 美術出版社 (2010).